

自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける図画工作科授業の創造

—第5学年「木の子の一日 in 附属小～あんなところやこんなところに～」
についての考察—

奥 俊 明 [鹿児島大学教育学部附属小学校]

Creation of art classes where students continuously create their own artistic meaning and values: A look at the fifth grade "A day of Little Tree in the school: Every here and there"

OKU Toshiaki

キーワード：造形的な意味や価値、図画工作、造形的な視点、身体化、体験活動

1. 実践の目的

1.1. 実践の背景

私たち人間は、乳児期から、身の周りの対象や事象に手や体全体を使って関わり、多様な経験の基、感覚的に物事を捉えて生きている。その際、頭の中でイメージをもちながら創造的に考えたり、自分なりの意味や価値を更新し続けたりしながら生きている。そして、これから生きていく社会では、AIの進化やグローバル化が進み、多様な社会・文化が形成されていくことが予想される。そのような社会で知性や感性を働かせて、新たなもの・ことや、意味や価値を創り出していく力を発揮することは、これからより必要とされるようになる。

このような社会で生きていく人を育むために、創造活動を重視する図画工作科の役割は大きい。なぜなら、知性だけでは捉えられないことを、身体を通して、知性と感性を融合させながら捉え、創造活動の中で対象や事象の概念や自己を形成していくことが、図画工作科の担っている学びだからである。

また、新学習指導要領において、育成を目指す資質・能力の3つの柱それぞれに、「創造」が位置付けられた。このことは、造形的な見方・考え方を働かせた創造活動を大切にする図画工作科の特質を踏まえた目標となり、感性や想像力を働かせながら新しい意味や価値をつくりだしていくことがより一層重視されたことを意味する。そして、様々な造形的な経験を積み重ね、新しい意味や価値をつくりだしていく過程の中で、情操豊かな人間形成を図ることが求められている。

表1 本実践前の課題と要因分析

課題	課題の要因分析
<p>● 表現する際の発想面や技能面に多様性が少ない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでに学習した多様な造形的な視点や技能が十分に身に付いていなかったり、それらを生かして表現できていなかったりする。 ・ 他者や作品等のよさを感じられず、自分の表現に生かしていない。 <p>⇒ 感性や想像力を働かせながら、造形的な視点や技能が多様な場面で生きて働く概念として習得される、いわゆる身体化された状態を目指す手立てが必要。</p>
<p>● 自分の表現にこだわりがない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の思いやイメージと表現とを十分に関係付けられていないため、造形活動に意味や価値を感じられていない。 <p>⇒ 思いやイメージを膨らませながら対象や事象との関わりを深め、様々な造形活動に、自分なりの造形的な意味や価値をつくりだすことができる手立てが必要。</p>

1.2. 実践の方向

実践の背景を踏まえ、本校図画工作科の実践研究を振り返ると、これまでも創造活動を大切にしていた授業づくりに取り組んできた。特に昨年度までの「自分の思いを豊かに表現する図画工作科授業の創造」の実践では、深い学びに着目し、造形的な見方・考え方を働かせる授業づくりを目指した。

その際、造形的な見方・考え方を働かせた思考の過程を整理し、子どもの思いや表現上の課題を想定したことで、子どもが学習の目的を明確にし、思いやイメージを豊かにしながら意欲的に造形的な創造活動に取り組む姿が見られた。

一方で、表1のような課題も見られた（表1）。

これらを踏まえ、表現及び鑑賞の活動を通して、感性や想像力を働かせながら造形的な視点や技能を活用し、多様に表現する喜びや楽しさを味わい、自分なりの表現を追求する子どもの育成が必要であると考えた。

そこで、目指す子ども像を「多様に表現する喜びや楽しさを味わい、自分なりの表現を追求する子ども」と設定した。「多様に表現する喜びや楽しさを味わい、自分なりの表現を追求する子ども」とは、対象や事象を、感性や想像力を働かせながら多様な造形的な視点で捉え、自分なりのイメージを膨らませながら試行錯誤を繰り返す中で、自分なりの造形的な意味や価値となる表現の工夫や対象や事象のよさや美しさをつくりつづけていく子どもである。そして、自分の存在や成長を感じつつ、多様に表現する喜びや楽しさを味わい、さらに自分なりの表現を追求していく子どもと捉えた。

例えば、カラーセロハンを並べて窓に貼る活動において、「色を重ねて貼ると違う色がつくれたよ。いろいろな色があって虹みたいに見えてきた。」「離れて見るときれいだな。」「今度は、友達がやっているように形を変えたものを重ねて貼ってみようかな。」といった表現の工夫や対象や事象のよさや美しさをつくりだし、表現を追求している姿が考えられる。

これらの様相は、造形的な見方・考え方を働かせている様相と重なり、図画工作科の目標である「生活や社会の中の形や色などと豊かに関わる資質・能力」を育成していくことにつながると考える。

表2 多様に表現する喜びや楽しさを味わい、自分なりの表現を追求する具体的な資質・能力

知識及び技能	思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
<ul style="list-style-type: none"> 多様な造形環境（材料や場所など）や行為から見いだした造形的な視点を理解するとともに、それらを基に、工夫してついたり表したりすること <p>多様な表現及び鑑賞の活動で生かすことができる造形的な視点や技能 (身体化された造形的な視点) (創造的に表す技能)</p>	<ul style="list-style-type: none"> 材料や感じたこと, 考えたことを基に, 想像する力 多様な造形的な視点を基に, 試行錯誤しながら表現の仕方を考える力 多様な造形的な視点を基に, 作品などのよさや美しさを感じ取ったり考えたりする力 <p>自分にとって新しいものやことをつくりだす力 自分なりに新しい見方や感じ方をつくりだす力</p>	<ul style="list-style-type: none"> 自ら「つくり, つくりかえ, つくる」過程を通して, 新しいものや未知の世界に向かう喜びや楽しさを味わいながら, もの・ことをつくりだしていく態度 自分なりの造形的な意味や価値をつくりだしながら豊かな生活を自らつくりだそうとする態度 <p>表現及び鑑賞を繰り返し, 自ら造形的な意味や価値をつくりだす態度</p>

そこで、これらの様相で働く資質・能力を具体化するために、図画工作科で育む資質・能力の3つの柱の中にある「創造」の部分を中心として目指す子どもの姿と関連させて具体化することで、より明確になると考え、表2のように整理した（表2）。

これらの資質・能力は、単体で働いたり順序性があったりするものではなく、それぞれに相互に関連させながら育成を目指すことが大切である。

よって、このような資質・能力をもった子どもを育むために、感性や想像力を働かせながら、これまでに身に付けてきた造形的な視点や技能を存分に活用・発揮し、造形的な視点や技能が相互に関連付けられたり組み合わせられたりして多様な場面で生きて働く状態（身体化）にしていくことが大切であると考え。その際、造形的な視点や技能の身体化を図りながら、造形活動の原動力となるように自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづけていく経験を積み重ねていけるようにすることが大切であると考え。

そこで、以下のような実践主題を設定した。

「自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける図画工作科授業の創造」

2. 実践の内容

2.1. 自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける図画工作科授業とは

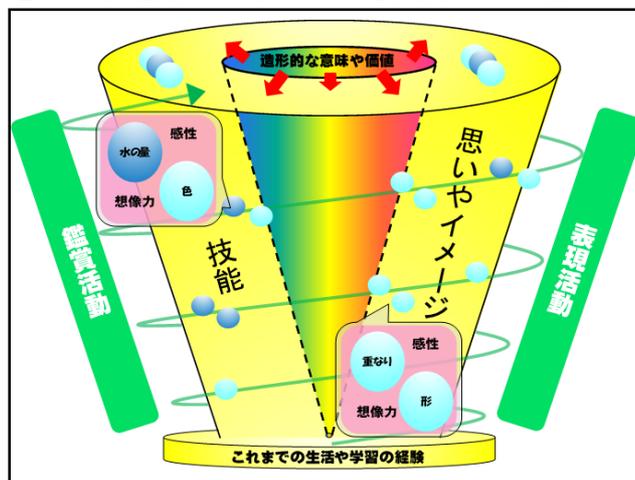


図1 自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける過程

自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける図画工作科授業を、次のように捉えた。

「造形活動への思いを基に、感性や想像力を働かせながら、表現及び鑑賞の活動を繰り返し、造形的な視点や技能の身体化を図る体験的な活動を通して、子どもが自分なりの表現の工夫や対象や事象のよさや美しさをつくりつづける授業（図1）」

まず、題材に出合い、これまでの生活や学習の経験から、造形活動への思いや問題意識をもち、造形的な創造活動が始まる。

次に、感性や想像力を働かす体験的な活動を通して、表現及び鑑賞の活動を繰り返しながら、対象や事象に関わるよさを実感し、学習内容に応じた造形的な視点や技能を理解したり、思いやイメージをもったりすることになる。

その際、これまでに身に付けてきた造形的な視点や、友達の表現や参考作品などを鑑賞し見いだした造形的な視点で、対象や事象を捉え、造形的な視点や技能を相互に関連付けたり組み合わせたりして、多様な表現及び鑑賞の活動の場面で生かすことができる身体化した造形的な視点や技能を身に付けていくことになる。

そして、このような様相の中で、自らの表現や関わり方を捉え直し、表現の工夫や対象や事象のよさや美しさといった自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづけることになる。さらに、これらを原動力にして、よりよい表現を追求していくと考える。

したがって、授業創造の際に、学習内容や教師の具体的な働きかけを明らかにするために、本年度は、次の視点から授業創造の実践を進めることにした。

- 視点1 造形的な視点や技能が身体化されていく状態の明確化
- 視点2 対象や事象に関わるよさを実感する体験活動の設定

2.2. 自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづける図画工作科授業創造の基本的な考え方

視点1 造形的な視点や技能が身体化されていく状態の明確化

図画工作科において、知識は「造形的な視点を理解すること」として整理され、感覚や行為を通して、感性や想像力を働かせながら実感をともなって身体化した造形的な視点へと高めていく必要がある。その際、つくったり表したりする技能を伴いながら、「思考力、判断力、表現力等」や「学びに向かう力、人間性等」と関連し合って身に付いていく。

そこで、造形的な視点や技能が「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の資質・能力と関連しながら、どのように身体化されていくのかを整理することで、学習目標を具体化する際の視点になると考えた。

まず、造形的な視点や技能が身体化されていく状態の変容を表3のように整理した（表3）。

表3のように、3つの資質・能力が関連し合いながら状態が変容する中で、これまでに身に付けてきた造形的な視点や技能を活用・発揮し、造形的な視点や技能が相互に関連付けられたり組み合わせられたりして多様な造形的な活用場面で生きて働く状態（身体化）になっていくと考える。

表3 造形的な視点や技能が身体化されていく状態の変容

身体化されていく状態	知識及び技能		思考力, 判断力, 表現力等	学びに向かう力, 人間性等
	知識	技能		
題材と出会い, これまでの生活や学習の経験を思い出し, 表現への思いや見通しをもっている状態	経験から再生的に見いだした造形的な視点	経験から再生的に見いだした技能	再生する力	造形活動への興味・関心
これまでの生活や学習の経験から見いだした造形的な視点や技能と, 対象や事象を鑑賞して見いだした造形的な視点や技能を関連させて, 新たな表現方法等を見いだしたり表したりしている状態	経験や他から得て関連させた造形的な視点	経験や他から得て関連させた技能	発想・構想・鑑賞する力	表現や鑑賞を繰り返し試行錯誤する態度
上記の状態において身に付けてきた造形的な視点や技能を活用・発揮し, 多様な表現や鑑賞の場面で生きて働く状態	身体化された造形的な視点	創造的に表す技能	他の造形的な活用場面を捉え, 造形的に思考する力	豊かな生活や社会をつくりだす態度

ただし, 身体化された造形的な視点や技能は, 題材内や題材間, 小学校6年間といった長期的な期間で身に付き, 無自覚的に活用・発揮していることもある。よって, 身体化されていく状態を見取るためには, 表3を基にした各題材で育む資質・能力の3つの柱を視点に, 子どもの状態を把握する必要があると考える。そして, 小学校6年間という発達の段階を経て造形的な視点の概念がどのように形成されていくかを, 小学校学習指導要領解説図画工作科編を基に, 図2のように捉えた(図2)。図2のように, 6年間を通して気付くといった「認知する」ことから「理解する」過程を経る。そして, 多様な学習活動や扱う材料や用具などにより, 図2のように造形的な視点の広がり, 質的に深まっていく。例えば, 形という造形的な視点を, 低学年では, 「いろいろな形があるな。」と認知する。そして, 中学年では, 「角ばった形は, 強そうな感じがある。」といった形から派生する「感じ」まで分かることになる。さらに, 高学年では, これまでの形の捉えを含めて, 「角ばった形は, 強そうな感じがあり, 重量感を出せる。」といった造形的な特徴を理解し, 形の概念を形成していく様相が考えられる。このように, 各題材内で感性や想像力を働かせながら, 造形的な視点や技能を体験的に身に付け, 経験として積み重ねていくことになる。そして, これらの経験が積み重ねることによって, 図2にあるように, 造形的な視点を発達の段階に応じて認識しながら, 概念として形成していくと考える。

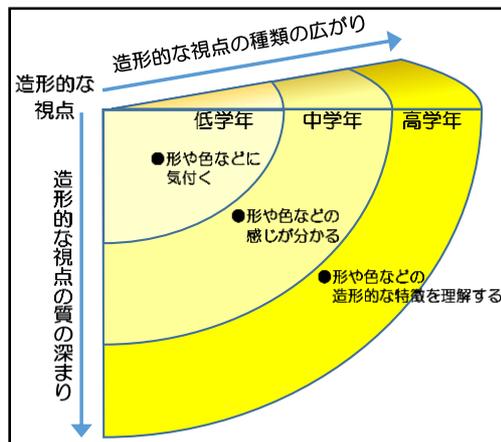


図2 造形的な視点の種類の高まりと質の深まり

視点2 対象や事象に関わるよさを実感する体験活動の設定

造形的な視点や技能が身体化されていくためには、ただ単に頭の中だけで理解するのではなく、体験的な活動が必要であると考え。なぜなら、人は、手や体全体の諸感覚を基に対象や事象を認識し、想像力を働かせながら新たに対象や事象を捉え直し、関わりを深めていくからである。このことが繰り返され、創造活動が行われることになる。その際、「あっ、これは、この前やったことと関係がありそうだな。」や「すごい、このことをどこかで生かしてみよう。」「実際に触ると、こんな感じがするんだな。面白いな。」「友達のあの見方や考え方は、自分には無かったな。試してみようかな。」といった対象や事象に関わるよさを実感する心の働きがあり、感動を味わうことで、より豊かに感性や想像力が働き、造形的な視点や技能が更新され、身体化を図りながら、自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづけていくことにつながると考える。

そこで、これまでの実践や、上記のような対象や事象と関わるよさを実感する心の働きを伴った子どもの様相から、図3の【対象や事象に関わるよさを実感する要件】を設定し、体験活動を具体化する。具体化の手順として、図3のように整理した。前頁表3のように身体化されていく状態と関連させながら、学習内容に合わせて、具体化していく。

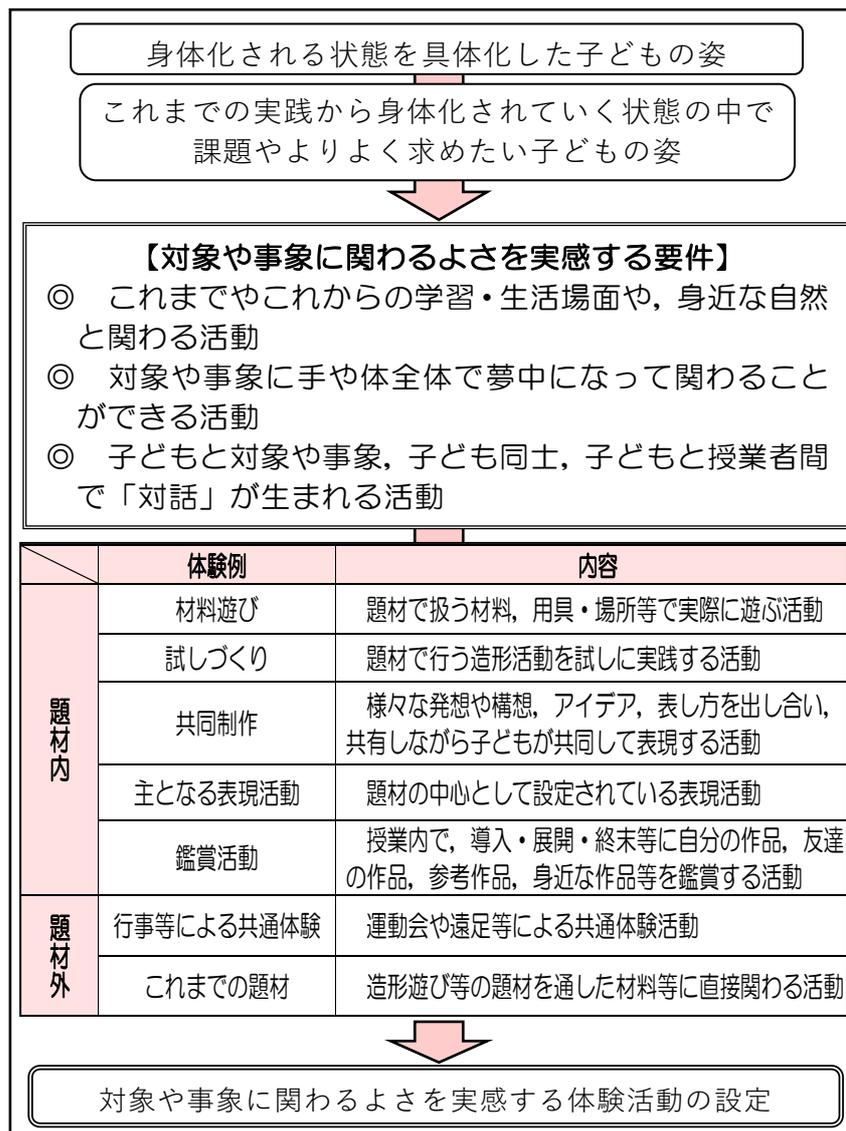


図3 対象や事象に関わるよさを実感する体験活動の具体化の手順

まず、題材の内容に応じて前頁表3を基に、身体化されていく状態を、子どもの姿として具体化する。次に、これまでの実践を基に、それらの子どもの姿において課題となる点やよりよく求めたい点を明らかにする。そして、明らかになった子どもの姿から、【対象や事象に関わるよさを実感する要件】を基に、いつ、どのような体験活動を設定するかを明確にする。

3. 実践の具体化

3.1. 第5学年「木の子の一日 in 附属小～あんなところやこんなところに～」(造形遊び)における授業実践 題材の位置とねらい

この期の子どもたちは、空想の世界に思いをはせ、自分なりのイメージをもって表現しようとする意欲が高まってきている。また、対象の造形的な特徴を生かし、発想し構想を練るなどして、見通しをもって表現活動を進めていくことができる。そこで、本題材では、妖精の一日を写真で表現する活動を通して、①場所の特徴や画面構成を考える際に形や色などの造形的な視点で対象や事象を捉え、発想・構想したり、自他の作品を鑑賞したりしてつくりだす力や感じ取る力を伸ばし、意欲的に造形活動に取り組む態度を養うことをねらいとしている。

このような学習は、6年生の題材「コマ撮りアニメーション」で、部品の配置や動かす部分などを工夫してコマ撮りをし、そのつながりから生まれる動きの面白さを生かしてアニメーションをつくる工作の題材へと発展していく。

指導の基本的な立場

本題材の面白さは、場所の特徴からイメージをもち、学校生活と関連させながら、人形の動きの様子を写真で切り取り、妖精(木の子)の一日を物語にして写真で表現するところにある。

そこで、この面白さを味わわせながら、上記①のねらいを達成するために、妖精に扮した人形を「実は、附属小のあんなところやこんなところで過ごしている」といった設定の下、iPadで写真に撮り、物語をつくる活動を設定する。特に、学習の展開にあたっては、下記の3つを考慮する。

- 場所の特徴や画面構成、人形の動きなどを視点に表現や鑑賞できる活動を設定する。
- 試行錯誤できる時間や場を設定する。
- 友達と対話しながら、多様な見方や考え方に気付くことができるグループ活動を設定する。

子どもの実態

知識及び技能

- ・場所の特徴から、場所の利便性については気付いている。
- ・場所の特徴から捉えられる形や色、その感じまで十分に気付いていない。
- ・写真の画面構成への意識が少ない。

思考力、判断力、表現力等

- ・妖精の様子を、「だれと、どのように」といった具体的なイメージをもつことができる。
- ・妖精の様子を場所と関連させてイメージすることができていない。

学びに向かう力、人間性等

・多くの子どもが工作の学習が好きであるが、「思い通りにつけれない」という理由で好きではない子どももいる。

・友達と一緒に活動することに好意的で、表現することを楽しさを味わえている。

これらの実態から、試しづくりの時間や、互いの表現を鑑賞する時間を設定し、表現する際の「場所の特徴」と関連させた工夫する視点を明確にすることを中心に学習を展開していく。

指導上の留意点

・「思いをもつ・見通す」段階では、表現の見通しや造形的な視点に気付くことができるようにするために、試しに妖精のある一場面を写真に切り取る活動を設定する。

・「思いを表現する」段階では、多様な造形的な視点を基に、豊かに表現することができるようにするために、自分や友達の表現を比べ、工夫するポイントを交流し、自分の表現に関係付けさせる。

・「思いを味わう」段階では、思いやイメージと造形的な視点を基に、考えたことを関係付け、豊かに表現できたことを実感させるために、製作過程を振り返りながら、感想を交流する。

題材の目標

【知識及び技能】

- ・場所の特徴や写真の画面構成、人形の動きといった造形的な視点を理解することができる。
- ・iPad等のICT機器を適切に用いながら、人形の配置等を考え、表現を工夫することができる。

【思考力、判断力、表現力等】

場所の特徴や画面構成、人形の動きといった造形的な視点を基に、妖精の一日をイメージしたり、友達の表現のよさに気付き自分の表現に生かしたりすることができる。

【学びに向かう力、人間性等】

学校生活の時間や場所を基に、あんなところやこんなところに隠れている妖精を想像し表現することに興味をもち、試行錯誤しながら進んで表現することができる。

指導計画(全5時間)

【主な学習活動】

- ①あんなところやこんなところにいる妖精を想像し、身の周りの時や場所を生かして写真で物語にすることについて話し合う。
- ②妖精の一日を想像しながら、グループで写真に表す。
- ③互いの表現を鑑賞し、よさを交流する。

本時(2/5)

【本時の目標】

図工室を使って妖精(以下、木の子)の様子を試しに表現する活動に興味をもち、進んで取り組むことを通して、場所の特徴や画面構成、人形の動きといった造形的な視点を基に表現するよさに気付き、具体的な木の子の一日のイメージをもつことができる。

【本時の展開に当たって】

試しに、図工室での木の子の一場面を表現する活動を設定し、表現を工夫できたことや友達との表現を面白いと感じた理由について交流する。その際、見いだした視点を工夫するポイントとしてまとめる。

【実際】

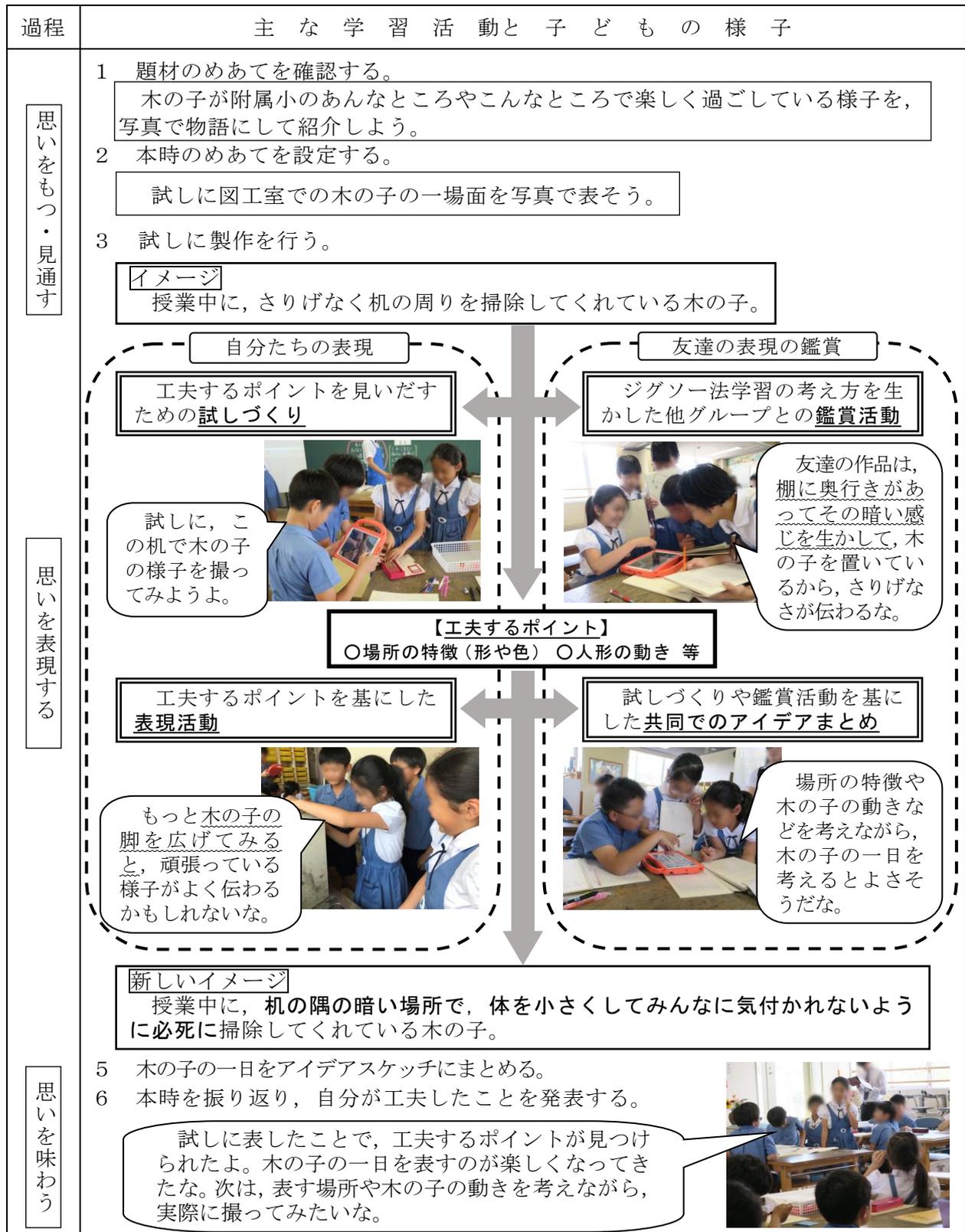


図4 本時の実際

3.2. 授業実践の考察

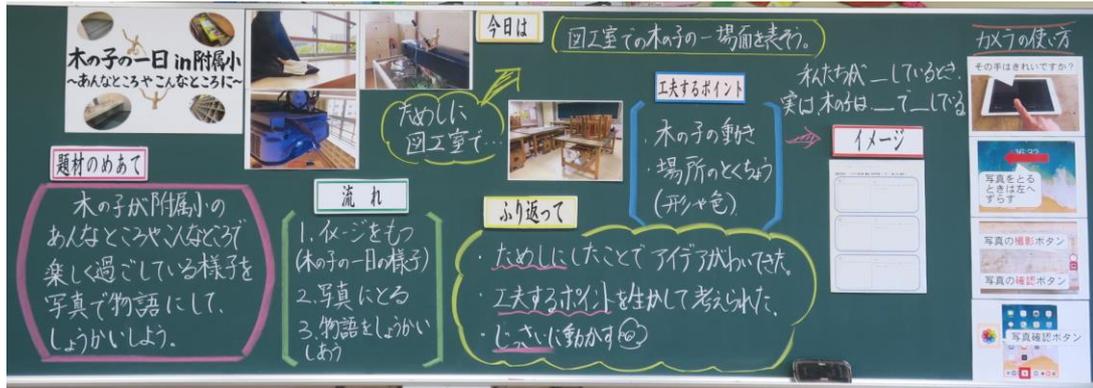


写真1 本時の実際の板書

授業創造の視点として「①造形的な視点や技能が身体化されていく状態の明確化」と「②対象や事象に関わるよさを実感する体験活動の設定」を設定して実践を進めた。①に関しては、図2にある発達の段階に応じた概念形成過程を基にしながら、表2の子どもの状態から本時の目標を具体化することができた。そのため、どんな造形的な視点や技能がどのように身体化されていくのかを教師側が規準をもって授業に取り組むことができた。また、②に関しては、①で明確にした造形的な視点や技能を学習内容にどのように具体化するか図3を基にしながら、具体的な活動を見いだすことができた。そのため、写真1の「ふり返って」の子どもの発言にあるように、子どもが表現と鑑賞を行き来しながら、造形的な視点を自ら見いだすとともに、それらを活用して自分の表現に生かそうとする姿が見られた(写真1)。今後は、このような姿を、実践テーマにあるように、自分なりの造形的な意味や価値をつくりつづけていけるように、6年間の学習計画を見直すなど、カリキュラムマネジメントを意識した学習内容の具体化を図っていく必要があると考える。

付記

本報告は、鹿児島大学教育学部附属小学校令和元年度研究紀要で発表した研究内容等に基づき、図画工作科において研究をさらに発展させ、その研究成果をまとめたものである。

参考文献

- 阿部宏行 (2017). 小学校新学習指導要領ポイント総整理 図画工作 東洋館出版
 森敏昭 (編著) (2010). よくわかる 学校教育心理学 ミネルヴァ書房
 森田勝之 (2008). 0歳から育てる脳と心 創元社
 文部科学省 (2018). 小学校学習指導要領解説 図画工作編 日本文教出版
 田村学 (2018). 深い学び 東洋館出版
 若元澄男 (2000). 図画工作・美術科重要用語 300 の基礎知識 明治図書
 ヴィゴツキー (2002). 新訳 子どもの想像力と創造 新読出版